

タイトル：2022年度 教育セミナー（第18回）

日時：2022年9月15日（木）～18日（日）

ハイブリッド開催

「エジプトで学ばされた生き延びるための処方法：ジェンダー、社会階級、グローバルネットワークに着目した社会考察」

鳥山純子（立命館大学国際関係学部）

報告者はこれまで、主に現代エジプト都市部の女性たちの生き方を対象に、人類学的手法で日常生活に迫り、個々人を社会的に位置付けた考察を目指してきた。その際、研究という営為の究極の目標は「自分が人間らしく生きていけること」にあった。

1998年に渡埃し、半年とたたずエジプト人男性と結婚した報告者は、夫となった男性の家族と共に暮らしていた。「中東の文化」に憧れを抱き、エジプトの普通の人々の生活を知りたいと願っていた報告者にとって、それは現地の生活をありのままに体験する絶好の機会となったが、すぐにそれは落胆と自分が自分であることを否定されるつらい日々に変化した。共に暮らしているからといって、「中東の文化」の神髄は一向にわかるようにはならなかったし、何より相手の価値観のもとに自分の考えやこれまでの功績が無視され続けたように思える状況が耐え難かった。そこで生きていこうと思えば、常識の違いを学び、乗り越えるだけでなく、人として期待される個性や身の振る舞い方の違いのもとに、全く新しい状況の中で自分を作り上げなくてはならなかった。こうした経験を通じ、研究の目的は、興味対象について理解を深めることではなく、自分自身がどうしたら受け入れてもらえ、またどのように振る舞い、どのような人物であればできるだけよい評価を受けることができるのかを解明することに変化した。

その一区切りとして取り組んだ博士論文と続く書籍刊行では、2000年代のエジプト都市部で女性として生きていく方法を考察する上で、ジェンダー、社会階級、グローバルネットワークに着目した。それらは彼女たちの生き方から抽出した鍵概念ではあったが、結論では、それらのどれ一つとして単体で生身の女性たちを説明できる視座ではないと議論した。なぜなら、上記視座のどれもが、女性たちが生きる社会言説を支える無数のロジックの一つでしかないからである。（報告者も含む）人々は、当たり前のように矛盾し衝突する多数のロジックを生きている。状況に応じて特定のロジックを選び、瞬間的に選び直すこともある。こうした生身の人間を人として理解したいのであれば、たった一つのロジックから人々の行動を説明しようとする自体に無理があったともいえるだろう。

こうした気づきは、自分が生き延びることを研究の明確な目的と認識したことで得ることができた。自分が生き延びるためだからリアルに対象に迫ることができる。また学問的洗練以上に具体的に「効果のある」考察が必要になる。自分の研究の土台が明確になったことで、研究者として目指すものや捨てていいものを明らかにすることができた。自分を事例とした偏った議論ではあるが、参加者のみなさんにとって、改めて自分が研究することの意義や目的を振り返る機会になったのなら嬉しい限りである。